

(仮称)

## ゆきのさと自由が丘通信

《2020年4月、小学校開校をめざして》

認定 NPO 法人北海道自由が丘学園・ともに人間教育をすすめる会 / 「自由な小学校」をつくる会

札幌市豊平区月寒東 1-15-5-11 ☎(011)858-1711

## 12月9日(土)の学習会・望年会のようす

学習会は、「ニール、デューイの思想と自由な教育」のテーマで、ネットに載っていた「きのくに通信」から引用し、堀さんが書いたニールとデューイの紹介文を資料としました。

参加者は、NPO 理事会直後で、吉野、田中、大塚、吉田、太田、廿日岩、鈴木伸子、池内、川島、鈴木かおり、北、滑川、尾田、細田(以上 NPO 関係者)、手嶋、加藤、井内(敬称略)の17名でした。



学習会は初めに各自資料を読んで、1人3枚渡したポストイットに感想・気づき・疑問などを書いてもらい、KJ法で黒板に整理しながら意見交換しました。大まかに出てきたカテゴリーは「問題の子ども」「教師のあり方」「理想が高すぎないこと」「学びの環境・活動」でした。話題にしたのは、まず「困った子ども」の心理的背景について。そこから教師の姿勢や叱ることについて考え、子ども

の訴えを受けて権威者として裁くのではなく、対等な人として考えを伝えるべきでは、というような意見が出されました。「理想」については、高すぎる固定像ではなく、目指す方向性を持つことは必要では、今の興味を大事にすることが大切、という意見が出されました。そして、子どもたちに「活動的な仕事(active occupations)」を用意することの大切さ、幼児教育・保育から学校教育へそれをどう発展させるか、子どもたちの「今生きてるぜ!」という実感を大切にすることがまず第一ではないか、という考えが出されました。オープンエンドで終えた話し合いでしたが、何か心に引っかかるお土産をそれぞれの方が持ってきた学習会であったなら幸いです。また、機会を見つけて企画していきたいと思います。

さて、その後の望年会は、井内さんが帰られ、日沖さんが途中参加で、みなさんから1年の振り返りや来年の抱負などを語り合いながら9時半近くまで盛り上がりました。延長戦も6名で11時頃まででした(ちょっと飲みすぎ…)。差し入れ持参の方々、随分たくさんありがとうございました。

## 「ぴっばら」に出前説明会、行きます!

来年2月2日(金)、旭川の「ぴっばら」へ出前説明会に行きます。その日はお泊り会とのことで、お忙しい日ですが、9時半過ぎに伺って帰りのミーティングまで見学させていただく予定です。また、13時半から1時間ほど、関心のある保護者の方々に「きのくに」見学VTRを紹介し、「ゆきのさと自由が丘学園小学校」のイメージを持ってもらえるよう考えています。NPO理事の二階堂と細田が伺います。

他の幼稚園・子ども園にも伺います。ご希望がありましたら、ご連絡ください!

## 支援者からのメッセージ

今回は、細田の大学時代の同じゼミの後輩で、「つくる会」の活動に協力してもらっている加藤裕明さんからです。彼は、高校で演劇部の顧問をして、傍ら通う大学院でも演劇教育論を研究しています。

## 演劇教育と子どもたちの発達

加藤 裕明<sup>\*1</sup>

一口に「演劇教育」とは言っても、そこには大きく言って3つの内容があります。すなわち①「演劇鑑賞」、②「教育方法としての演劇教育」そして③「演劇体験」の3つです。①は、演劇作品を観客として鑑賞し、作品の意味やねらいについて考える活動であり、②は、上演を目標とはせず、教育の手段として演劇的手法を用いる教育活動です。これに対し③は上演を最終目標とする活動です。3つにはそれぞれに重要なねらいや特質があります。例えば、①なら、「全校芸術鑑賞」のように一度に大勢の子どもにプロの公演を鑑賞する機会を与えることが出来ます。また②なら、演劇的表現を媒介としてその面白さを味わったり、あるいは教科の内容を理解することを目指します。上演を目標とはしないので、子どもは「見られている」という緊張なしに、表現に集中出来るという利点があります。ニールも言及するコールドウェル・クックはじめ英米の演劇(ドラマ)教育(Drama in Education)においては、20世紀初頭から数多くの実践と研究が積み重ねられてきました。その歴史は、つまるどころ、教育方法と

\*1 札幌平岸高校教諭。演劇部顧問。なお加藤の演劇教育論の詳細に関しては、博士学位論文『演劇教育による協働的創造性育成過程の質的研究—演劇部活動における高校生の変化—』北海道大学学術成果コレクションHUSCUP, 2016. (<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/54839>) を参照いただけましたら幸いです。

してのドラマにより個人の発達を促す、という理念が主軸となって展開されてきたと私は見ています。

しかし、あえてここで私が強調したいのは、他者との関係性から孤立する子どもたちが多い現代において、最も重要な演劇教育は、③の「演劇体験」であり、その中でも特に、英米のドラマ教育が見過ぎてきた視点、すなわち協働による子どもたちの関係性の発達に寄与するものとしての劇的体験です。そもそも演劇は、人間と人間の関係性に関わる芸術であり、スタッフをも含めた協働によって創造される芸術です。そこでは個が個（孤）として生きるのではなく、個が関係性の中で生きることが求められます。舞台の上では、「他者」（相手役の人間あるいはスタッフの創った大道具、小道具といったモノを含め）と対話し、価値観の相違を乗り越え新たな関係性を結びます。更に、劇場に足を運んだ観客という真実の他者との出会いによって、自分が舞台の上でどのような関係性を生きたのか、それを第三者からはどう見られていたのかを客観視し、検証する経験を得ます。私が上演を最終目標とすべきと考えるのは以上の理由によります。しかし、演劇が芸術教科から排除されてきた近代日本の公教育においては、指導者不足もあり、上演自体が壁となり子どもたちの前に立ちただけです。教師の支援は、壁の前に立ちすくむ子どもたちとともに、壁にぶちあたり伴走することです。その歩みは時に重く、後退することさえあります。SNSに浸されている我々は、お手軽に「教育効果」を得たいと考えがちですが、そもそも効率性や生産性とは無縁のものが演劇という芸術活動です。登り切った者にしか地平線や水平線を見はるかすことはできないのと同様、演劇上演もまた、愚直ながら一步一步、舞台という高みに向かって子どもたちと歩んでいくしかないのだと思います。その時はじめて子どもたちは変わり、その変化に教師は関わった、と言えるのではないのでしょうか。



<イメージ写真>

## 「きのくに」講演会、反響つづく

11月25日の道新の記事「読書の声」です。

### 子どもの自主性育む学校に 大学生 杉浦健太（稚内市）

生まれつき茶色い髪の子女生徒に、黒髪にするよう染髪を強要した大阪府の高校の指導が、物議を醸している。度重なる染色で頭皮はかぶれ、髪はぼろぼろになり、ペナルティーで文化祭や修学旅行にさえ参加できなかつたという。

そんな中、本紙の記事で体験学習などを通じて子どもの自主性を育てるきのくに子どもの村学園（和歌山県）について知った。同学園には試験も校則もなく、「自己決定の重視」「個性の尊重」「体験学習」が基本原則だという。

本来、学校の主体となるべきなのは子供たちだ。大人になるためには規則を守ることは大切だが、今回の大阪府の高校のように、学校の評判が下がる一などの理由で、生徒が生まれつきもっているものを否定することは、いくら学校の権限といっても許されないのではないか。

「きのくに」のように自由にするのは難しいだろうが、子どもたちが「自分たちで学校を作っている」と自信を持って言える場所こそ本当の学校だと、私は思う。

私も中学・高校に勤務してきたのでわかるのですが、特に高校は公立も私立も偏差値ピラミッドのどこかに格付けされるので、その格付けが下がることにもものすごい恐怖を感じています。北海道なら『道新受験情報』とかの受験特集でランキングなどが載りますし、保護者の噂や中学校や塾での評判などにもものすごく過敏になります。外面というか外部の評判を良くするために、大学等の進学実績や部活動の大会実績、特色ある活動などのPRに躍起になります。自ずと詰め込み受験指導や部活の熱血指導、外聞のいい生徒の活動などに必死になります。いわゆる生徒指導も生徒たちの服装や髪などの見栄えを良くするために徹底されます。そして生徒たちの不平を抑えるためにも、統一した基準で「指導」という名の取り締まりをするのです。例外は認めません。だから元々地毛が茶色っぽい生徒でも「黒く染めるように」となるのです。そして案外それを無慈悲に徹底できる教師が「力ある教師」として現場で幅を利かせてしまうことも多いのです。「これが教育か?」「なぜ原点に戻って教育本来の目的、人の成長の支援を考えることができないのか?」と、うんざりしてきます。私もできる範囲での提案や生徒指導以外での人育てに努力してきましたが、やはり現場には限界があります。だからこそ現場を飛び出して、「きのくに」のような学校を一からつくらなければ、子どもたちの自己肯定感を毀損せず真つ当な育ちを支援する教育は実現できません。本当に何とかしなければと思います!

### 来年の希望・展望！良いお年を！

2017年もあと僅かですね。12月11～15日は、月寒子ども館に釧路教育大生が実習に来ていて、子どもたちの刺激になる実践が続いています。学校づくりは、今年は9月2日の堀真一郎さんの講演会が一つの足がかりになり支持者の輪が広がりましたが、来年はもっともっと広げていかねばなりません。来年は校舎確保に向けて札幌や千歳近郊の自治体にアプローチして、自由な小学校実現に向けて大きく一歩を踏み出したいものです。



みなさん、来年も一緒に頑張っていきましょう！ 良いお年を！